

神宮連歌壇の北野天神説話

(一) 歌詰橋の狂歌話

伊勢で書き留められた神宮文庫蔵『かさね草紙』(寛永二十年書写)につぎの西行説話が収められている。

西行法師執行にいてける時に有酒屋の壺のうちに梅の花の咲たるを見て歌よみて酒をひとつ飲まはやおもひ西行うちへ入りてよむ

壺のうち匂ふと見ゆる梅の花ますひとつさけ春のしるしに
うちよりとりあへず

壺のうち匂ひし花はちりはててかすみそ残る春のしるしに
とてかすをひとつかみまひらせけり

伊勢の西行説話については、別稿を用意しているので、ここでの論述は省略するが、こういう話を読むと、なぜこれが『かさね草紙』に記録されたのだらう、といつも思う。というのも、この話は『山州名跡志』(巻之九)にも、西行の「歌詰橋」として紹介されている。『山州名跡志』には、別伝としてこの橋の由来が伝えられている。

橋ノ名義。伝ヘ云フ昔シ西行法師此所ヲ過ルニ。童子出テ。向テ詠歌ス。西行即チ返歌ス。童子又詠ズ。贈答数返ノ後。西行遂ニ負タリ。仍号_レ之ト。

神宮連歌壇の北野天神説話

小林 幸夫

西行が童子との歌争いに敗れたので、こう名づけられたという。歌に詰まったからというのである。ならば西行を言い負かしたこの童子は、神の化身とでもいいたいのであろう。

『新撰狂歌集』(巻上)にも類話が記録されているが、こちらは西行の話ではない。

北野辺の酒屋へ立よりてよめる

前大上戸朝臣

壺のうちに匂ふと見えし梅花まづさけ一つ春のしるしに
酒屋の女房返し

壺のうちに匂ひし梅も散はてて霞ぞのこる春のしるしに

これなら「梅」と「酒」の詠まれる理由はわかる。北野は梅の名所であり、麴座があったので、「酒」の秀句が作られても不思議はない。酒の縁で「霞」(酒かす)が詠み込まれる。いかにも北野の春らしい歌である。「前大上戸朝臣」と洒落のめしているが、貴人との歌問答の相手が、「酒屋の女房」というのも、たんに尊貴の人と俗人という対比にとどまるものではない。この場合、酒屋の女房は、西行をやり込めた童子のごとく、即座の機転で返歌する。歌掛けに勝利する女房のわざを頌えて、初春の祝言とするのであろう。『新撰狂歌集』が、この贈答歌を「春」の巻頭においているのは、おそらくそのためであらう。

また別の「歌詰橋」の説話が、『かさね草紙』に収められている。

神宮連歌壇の北野天神説話

こちらは和泉式部の話である。

むかし帝に「ひなさき」といふ題を和泉式部にくだされけるに、二三日も案じたまひけれとも、「ひなさき」といふ題にてしかるへき歌なしとて、北野の天神へ願かけてまいらせけるに、一条と北野のあひの橋の詰めにて、年のほと八十斗なる人、和泉式部にあひて申けるは、「風ふかは、といふ五文字あり」といひてゆく。和泉式部これを聞て「歌詠むへき便をもとめたり」とてさとりて其橋より歸りて詠みたまひけり。

風ふかはそのひなさきそ梅の花にほひのよそへ散るのをしきに詠みて、帝へあけたて奉り、それよりして今の世のいたるまで、其橋を戻り橋といふ事、此時の子細なり。かの年寄りたる人は北野の天神さまなるへし。

『かさね草紙』には三つの北野天神説話があるが、これもその一つ。帝より与えられた歌題に詰まった和泉式部が、北野天神の助力によって歌を完成させる。そして末尾の句のごとく、連歌の神、北野天神の威徳が頌えられる。さらに「戻り橋」の由来が語られることにも注目すべきだろう。歌に詰まった式部が、「一条と北野のあひの橋の詰め」で、天神から歌のヒントをもらう。歌ができあがつてそこから立ち戻ったゆえ、「戻り橋」と名づけられた。ここからすればこの「歌詰橋」は、「戻り橋」の由来を語る話でもある。

同じ「歌詰橋」の説話にしても、『かさね草紙』の場合は、北野天神の援助を言挙げして歌徳説話の体裁をとる。『かさね草紙』には、歌徳説話と思われる話他にも多い。つぎの北野天神説話もその一つである。

(二) 歌・連歌の神

歌に執心して渡世に窮した男が、愛想を尽かした女房に無理やり木

綿売りに追い立てられるが、和歌に心を奪われているゆえ売れるはずもない。今日も今日とて、五条の橋の辺りで上の句を案じていると、七十ばかりの老人に出会って、下の句を得る。歌に窮して北野の神を念じたところに願れ給うたのである。歌の見事に感じた内裏様から褒美をいただいて、男は末繁昌したという。

ここに不略したる人あり。渡世のいとなみはさておきて、朝夕歌道に心をかよはしけり。女房かくのていを見て、「今日より歌詠むこと無益、身上なりてこそ歌をも詠み遊山などはよけれ、御身は今日食せん物もなきに、その道斗に心をかよはし、我をは何になれとおもふてかやうにはしたまふそ」とくときけれども、男さらぬ跡にて門へそ出けり。女房あまりかなしく、「はや今年も暮方になるに何をもちて年をとらふとはおもふ男候そ」とて、則木綿一反をり出し男に与へていふやうは、「是を御売て此金にて年をとらふとおもふためなり。いまへてぬかりなく御売候へ」とこまゝと申含めけり。男是をうけとり五条の橋あたりに、此木綿をもちながら、

あけいたをたゞくや駒のあした哉

といふ上句をくり返し吟しけり。是をいかにと申に、大裏より「あけいたをたゞくや駒のあした哉」といふ句に付けたらんものには、何にても望たるべきとの札なりければ、扱さいく吟しけり。此男付かねければ、心中に思ふやう「あわれ北野の天神へ立願かけつべき」とおもふ心出来けり。爰に年のほと七十斗なる老人かくいふを聞て、

水と草とのさかひしられず

といひければ、男、老人の袖をひかへとかうの返事なくして、木綿を老翁に与へ、「かまひてく此句披露すへからず」とて、男我家に帰りけり。女、「木綿よく売しや」といひければ、男、「くれたる」と申。女房ことのほか腹をたて、有とあらゆるくときこ

と申けるこそ道理なれ。男余りに聞かねてすくに大裏へまいり、「御札のおもてにつきて参りたり」と奏問申、今の歌を紙にうつし上奉る。公卿百官奇異の思ひをなし、「扱々奇特なることかな。いか様汝は人間にてはあるまひ」など、疑われけるこそ理なり。「先々札のことくに」とて、望たるもの其外宝物数々被下けり。それより我家に帰り、女房にかくと語りければ、よろこふこと限りなし。末繁昌とさかへけり。是ひとへに歌道を心かけし故なり。今の老人は北野の天神にてありしとなり。兎にもかくにも歌詠むへきこととなり。

歌詠む身には天神の加護あることを説いて、結句のように語りおさめられる。男が下の句に窮して北野天神を念じたのが、五条の橋辺りとするのは、やはり意味があるにちがいない。「さいく吟しけり。此男付かねければ」とあるように、先の「戻り橋」と同じく、五条の橋は、歌に窮した「歌詰橋」である。五条といえ、五条天神に隣して道祖神の祀られる境の地である。そこに救いの神は顯れて、援助の手を差し伸べてくれる。こうして歌徳説話の体裁がととのえられて、北野天神への帰依が勧められる。

一首の上と下、その本末を付けるのが、この説話の眼目である。しかし、それにしても解釈がなかなか通じない。ただ『醒睡笑』（推はちがうた・巻之六）に類句があるので、それを参照すれば、少しは意味が飲み込めてくるだろう。

水と草とのさかひ知られず

板たたく馬屋の長の目は覚めて

「水と草との境目がわからぬ」という前句は、一句だけでは意味はなかなか通じない。まるで謎のようである。付句はそれを早朝の情景に解して、馬屋の長の日常とした。馬が板戸をたたく音に起こされたのであろう。まだ夜明け前のはの暗い頃、足元はおぼつかなく、水と草との境目さえつかない、というのである。

神宮連歌壇の北野天神説話

ふたたび『かさね草紙』の歌にかえれば、これも同じ曉方の厩の景とすればよからう。五条辺りには馬市が立ち、朝早くからひらかれたという。まさにその五条橋辺で、歌に詰まった男は、北野天神から下の句を貰いうける。境の地に顯れた神から「水と草とのさかひ知られず」の下の句を授かる。おもしろい「境」の秀句だが、歌道執心ゆえの功徳とでもいいたいようである。その結果、この貧乏な男は宝にめぐまれる。

歌・連歌の徳を言挙げする北野天神説話が、『かさね草紙』に記録されるのも、思えば不思議なことではない。中世から近世に至るまで、伊勢神宮神官によって連歌壇が形成され、江戸期に入っても伊勢連歌壇は、京洛の連歌師との頻繁な交渉があったことはよく知られている。極論すれば、守武俳諧はもちろん、伊勢俳壇も京洛の連歌壇との交渉なくして、その発展はのぞまなかっただろう。伊勢の連歌壇は、北野天神説話に託して、和歌・連歌の徳を語りついできたのである。

(三) 宗祇の祈禱連歌説話

江戸期には、伊勢神宮で、連歌は年三回、年中行事のようにして行われた。内宮長官が主催する正月二十五日の伊勢海連歌、八月十五日の月見連歌、それに加えて内宮神官岩井田邸で催される、正月六日の若菜連歌である（荒木田守良『神宮典略』）。ことに伊勢海連歌は、「宿梅」を発句として興行された。これらの連歌が、神宮の神事とどのように係わっていたか、詳しい事情は不明なところもあるようだが、神宮神官のあいだでの連歌の盛行を背景にして、年中行事化されたと考えても、およそ過つまい。

『かさね草紙』のつぎのような祈禱連歌説話もある。

御門をこりを御ふるひ被成いかなる事にてをちかねたるとき御祈禱に連歌をなされけり

神宮連歌壇の北野天神説話

露落て松の葉かろきあした哉

宗祇

雲のをこりをはらふ秋風

宗長

有明も日ませになれはかけもなし

宗順

連歌百首有けり則おこりをちて目出度とて御いはひありけり

病平癒を祈願して 発句、脇、第三句、いわゆる三つ物が、祈禱連歌として奉納されたのである。もちろん実際に興行されたと考える必要は少しもない。宗祇・宗長に仮託された連歌話にすぎない。『宗祇句集』にもこんな句は見つからない。なによりもこれらの付合を、細川幽斎の作とする別伝が、この祈禱連歌の、作り話であることを雄弁に物語っている。架空の話なのだから、この連歌がどこに奉納されたかを論ずるのは、無用の穿鑿である。どこであつてもいい。しかし、宗祇の話とすれば、北野天神と考えるのがふさわしい。彼は北野の連歌宗匠であつた。彼に付会されれば、いかにも宗祇の祈禱連歌ならば、功德もあろうと納得したにちがいない。

『かさね草紙』と時代を同じくする『醒睡笑』（聞えた批判・巻之四）にも祈禱連歌説話がある。こちらはまださしく北野である。

北野の神前にて、祈禱連歌あり。

かくなるものかさすらへの果

この神のかへり北野に跡垂れて

この付句、執筆書きとむると同じく、社頭震動し暫くやまざりつるは、神も大いに納受したまふにやと、人皆感じ申したるよし。

北野に跡を垂れて連歌の神と祀られた道真への尊崇の念は、かくして語られる。おそらくは連歌師のあいだに伝えられた話を、策伝和尚が記録したのであろう。祈禱連歌は、連歌師にとって生活の糧でもあつた。祈禱料がこれで稼げると、里村紹巴は語っていたという（松永貞徳『戴恩記』）。

それならば『かさね草紙』の祈禱連歌説話や北野天神説話は、神宮神官のあいだにも伝えられていたと思われる。後に内宮長官中川経雅

が、伊勢海連歌について、「詩連歌等之事ハ、菅家道真公を祖の如くする事、中世の流例也」（『経雅雜記』）と解説するように、伊勢神宮の連歌壇の場合も、「連歌に志あるもの」は、連歌奉納を年中行事としてきた。道真を連歌の神と仰ぐ心は厚かつたのである。

室町応永期の連歌論書とされる『連通抄』下は、ひたすら和歌・連歌に専心すれば、北野の神の託宣がえられるとまでいう。

一 和哥の道は是我等が身軀也、天竺の陀羅尼、漢土の詩、吾朝の哥、三国に伝来所也、三国大に和来也、去間大和こと葉とは大にやはらぐと書也、天地開白せしより以来、八雲立出雲八重がきの哥より、卅一字の詠発て明王明衣哥仏達者の代々に給す、今又北野の御代となり、此道殊外四方の民までも数寄の心有、極たる真言にて祈禱をいたさんよりも、北野の御託宣あり連哥を百韻興行すべし、去は連哥は無尽経と申経也と、天人顕て託宣あり、一心を静に取成時は無心の所有、今の世の人何事のやくか有や、念仏せんとすれ共さはりのみ也、又座禅の床も悪念耳起来る也、諸道の勤皆障の耳也、万事を抛たゞ無心に取向哥道に莅べし、一心のこやく有也

なによりも「連哥は無尽経」ゆえに、「極たる真言にて祈禱」するよりも、「連哥を百韻興行」すべきである。それでこそ神意に叶い、北野の「託宣」が得られるという。それならば連歌の功德は、祈禱連歌に及ぶものはない。このような連歌壇の趨勢、連歌の神として北野を信奉する流れは、江戸初期にまで及び、『醒睡笑』や『かさね草紙』の北野天神説話を生むことになるのだらう。歌に窮した人の前に示現して、その窮地を救うばかりか、病を癒し、福分さえ与えてくれる。「福を持ち連歌をもまたすべきなり／祈れや祈れ弁才天神」（『俳諧連歌抄』）と詠われるように、連歌の徳が宣伝された時代であつた。

(四) 北野・桜葉の宮

謡曲『右近』は世阿弥の作である。鹿島神宮の神官が京見物のついで、桜の名所として名高い右近の馬場に来たところ、北野の末社桜葉の宮の女神が顯れて、御代を寿ぐ夜神楽の一曲を舞う。

あら恥づかしや神ぞとは あさまには何といはしるの まつことありや有明の 待つことありや有明の 月も曇らぬ久方の 天照る神にては 桜の宮と現はれ ここにきたのの桜葉の 神といふべの空晴れて 月の夜神楽を待ち給へと 花に隠れ失せにけりや内宮にては「桜の宮」と顯れ、北野には「桜葉の宮」と祀られると名告って、女神(後ジテ)は舞う。伊勢「桜の宮」は、連歌師のあいだにも知られていたらしく、「桜の宮は伊勢内宮御事也、伊勢と云句に、さくらの宮付也」(『梵灯庵袖下集』・松平文庫本)といったように、「伊勢」との付合語となっている。さらに『梵灯庵袖下集』(松平文庫本)は、

北野にては桜の宮を桜葉の宮と申也、是は天神と成給も伊勢の御恩也、其恩に北野に伊勢をいはひ給へり、是を桜葉の宮と申也、たゞ桜葉共すべし、神の御名なり、能々心えべし

と続けて、伊勢の「桜の宮」が、北野に「桜葉の宮」と顯れ給うたと述べる。しかし、「天神と成給も伊勢の御恩也」などというのは、ずいぶんと両社の縁を強調する言い分である。なるほど「桜葉の宮」は、「桜の宮」と同体であると主張されることはある。つぎの『北野文義』(卷七十三)もその一つである。

内宮ノ末社花開姫命ト申、朝熊ノ社ニ坐ス、此御神ヲ花開姫命ト申トゾ、於ノ神宮ニ秘御神ニ座ストゾ、桜太刀神、同在所ニ座トイヘドモ、別ノ御神ノ由侍、並桜宮、是ハ大宮ノ辺ニ坐ス、御殿マシマサズ、此御神、北野ノ桜葉ノ宮同体ノ由奉レ申人有レ之桜ノ宮

神宮連歌壇の北野天神説話

西行ノ歌御裳濯河集ニ有レ之

「桜の宮」は内宮の末社。その祭神「桜太刀神」とは、『御鎮座本縁』にしたがえば「桜太刀神」(サクラオホトシノカミ)のこと。天上より天降って、その神霊は桜木に宿ると伝える。しかし、神宮側は「御鎮座本縁」に限らず、北野「桜の宮」との同体説をいうことはない。北野が伊勢とのつながりを強調して、「桜葉の宮」と「桜の宮」の同体説をいうのである。北野の連歌師もその説にしたがっているのである。

北野天満宮蔵『神記』によれば、「桜葉の宮」は、桓武天皇の子伊予親王とその母藤玄夫人を祭神とする。

中務卿伊予親王ト申テ桓武天皇ノ御子也、平城天皇ノ御代大同二年十一月二御門ヲ傾ケ奉ントシ給故ニ御母ノ藤玄夫人相共ニ瓦寺ノ北ナル所ニ押籠奉リ給ヘリ、仍自毒ヲ食テ萌御、此故ニ一殿ニ伊予親王ト御母ノ藤玄夫人御坐アル也、

『神記』はさらにつづけて、藤玄夫人は「早良親王ノ夫人」、「伊予親王ハ早良親王ノ御子」という一説を紹介している。母子ともに謀って平城帝を押し籠めんとして果たさず、自ら毒を服して果たたというのである。それならば「桜葉の宮」は、御霊を祀るといっていい。早良親王も神泉苑に御霊として祀られたのは、よく知られている。

『神記』はつづけて、

伊予親王ハ管絃ニ長シ給ヘリ、失給テ後チ世ノ中惡シキ心地起テ大嘗会等ヲモ止給キ、効驗無双ノ神也、天下ノ飢饉病患并非時横難、管絃等ノ能芸ヲ此神ニ祈申也、

と記す。疫病をもたらす御霊は鎮められねばならぬ。そう信じられて花鎮め、鎮花祭が執り行われ、この神の前に芸能が奉納される。桜の下で行われる花の下連歌もそういう芸能である。ならば御霊を祀る「桜葉の宮」が、連歌世界の関心を集め、北野と付合になったも当然であろう。『看聞日記』には伏見宮家の法楽連歌が記録されていて

神宮連歌壇の北野天神説話

(応永三十年五月二十七日)、そこに桜葉の宮も詠まれている。

梅はくち木も香こそかはらね

(御製)

此野とてかすみも(はるゝカ)朝日寺

長、

「〔雲〕(カ)きさくら葉の宮

行

前句の北野朝日寺に付いて「桜葉の宮」が連想されているのである。霞も晴れて桜に映えているのであろうか。それはまさに御霊神たる北野を慰める景色であろう。「桜葉の宮」が花の下連歌と結びつくのであれば、こうした情景が詠まれるのも自然であろう。北野社が、桜の神霊を祀る伊勢「桜の宮」と同体説を主張するのも、やはり連歌がらみの事情なのであろう。桜の霊を鎮める花の下連歌にとっては、「桜の宮」は、いわば血縁の神とみなされたのではないか。

(五) 北野天神の伝承歌

北野「桜葉の宮」と伊勢「桜の宮」は、こうして連歌を介すると、その地理的な距離以上に親近性をもつ。「かさね草紙」に北野天神説話が収められるのも、それらの説話が、神宮神官の連歌壇において交わされた話題であったからであろう。北野天神の徳を頌える話は、連歌の席の歌話として、恰好の話題となったにちがいない。そこで内宮権禰宜荒木田(井面)守平の編んだ『二根集』(文禄四年)から、北野天神の歌を取りあげてみよう。神宮連歌壇の連歌好士の関心のありどころが、見えてくるかもしれない。

五巻からなる『二根集』は、京洛の歌人・連歌師はもちろん、内・外宮神官の連歌愛好者からの聞書を集めたもの。第一巻は三條西実澄・水無瀬兼成・細川藤孝・紹巴・孝精、第二巻は守兼・守武・守彦・尚重・尚織・尚興、第三巻は守武・常信、第四巻は宗牧・守養・紹巴、第五巻は紹巴の名が挙がっている。

まずは第一巻に挙げられているもの。

冬は梅あざむく玉のひかりかな

宗牧

天神御歌。新古今に、

花と散玉と見えつゝあざむけば雪ふる里ぞ夢に見えける

あざむくハ、あひする心。

この歌は『新古今和歌集』(巻第十八・雑歌下)に収められる。流謫の地で降る雪を眺めて、夢に京を見たという。

つぎのも第一巻の聞書。「つくしにも」の歌は、「新古今」と傍書があるように、これも(巻第十八・雑歌下)の道真作のもの。「紫のゆかり」ではないが、ここ筑紫の国には無実の罪で流された私を、悲しんでくれるゆかりさえない、と歌う。

天神、筑紫にての御詠

宵のまや都の空にすみぬらん心づくしのあり明の月

新古今

つくしにも紫生る野べハあれどなき名悲しむ人ぞ聞えぬ

むらさき生る野べハあれど、我ゆかりハなき、といふ心也。

「天神、筑紫にての御詠」とはあるものの、「宵のまや」の歌は、『新古今和歌集』にも見られない。おそらくは彼の真詠ではなくて、数多くあるという伝承歌であろう。『菅家瑞応録』(菅家文庫蔵)には道真の臨終の歌として、この歌が詠まれているだが、あやしいものである。この歌については後にあらためて取りあげる。

『二根集』は、もう一首、「天神御哥」を書き留めている。これは第二巻にあって、「尚重・尚織・尚興」からの聞書である。岩井田氏は内宮神官の家で、尚重は重物忌父の職にあった。正月六日の若菜連歌は、内宮長官を迎えて岩井田家で行われたことを『神宮典略』は伝えている。また『荒木田守武集』には、尚重邸で詠んだ守武の一句も収められている。その尚重らからの聞書が、つぎの「天神御哥」である。宗長の「唐衣」の付句から、話題は天神の歌に移ったものと思われる。

かたつぶりさへつのおそろし

蝶の羽やかさねまほしきから衣

長(宗長)

天神御哥

三輪川の汀にあらふ唐衣とるとおもふなけると思ハじ

此哥也。しうじやくおそろしきと云々。

この一節はわからぬところが多い。いったい「執着おそろしき」とはどういう意味だろう。しかも「三輪川の」の一首は、三輪明神の神詠としてよく知られてをり、道真の歌ではない。謡曲『三輪』は、三輪の女神が、玄賓僧都に衆生済度のための懺悔物語として、三輪の神婚譚を語る。そこにこの歌が見える。

不思議なこれなる杉の二本を見れば、ありつる女人に与へつる衣の掛かりたるぞや「寄りて見れば衣の襟に金色の文字据われり 読みて見れば歌なり

三つの輪は清く淨き唐衣くると思ふな取ると思はじ

三輪明神から玄賓へ与えられた受衣は、罪業救済を念ずる神からの布施として歌われる。神授の衣については金春禅竹『明宿集』にも見えてをり、神詠について解説される。

玄賓僧都ノイニシエ、三輪ノ明神、受法受衣シマシマシテ、御神詠ニ、

三輪川ノ清クモ淨キ唐衣呉ル、ト思フナ取ルト思ワジ

無所得ノ心ヲ表ワシ、三輪清淨ノ慈悲深重ノ御心ニテ、施スルモ施セラル、モ、ミナ自他ノ相ナク、無所得ナレバ、

一方、同じ受衣説話を載せる『江談抄』は、山陰の庵を訪れた女人に、玄賓僧都が布を与えるのだが、僧都の歌は、

三輪川の渚の清き唐衣くると思ふな得つと思はじ

というように、どちらかといえば『二根集』に近い。しかし、この場合、女は三輪の神ではない。

いずれにしても謡曲の世界では、「三輪川の」の歌は、玄賓ではな

神宮連歌壇の北野天神説話

く三輪明神の歌として伝えられている。その神詠は罪業救済を乞うものである。この歌を『二根集』は、「天神御哥」として書き留めている。謡曲『三輪』には、「伊勢と三輪の神 一体分身のおんこと」と語られるように、三輪の神と伊勢の神は、一体分身であるとされている。この神道説話について荒木田守平らの神官が、不案内であったとは思われない。ではなぜ三輪の神詠が、北野天神の歌として語られたのか。その事情については、残念ながら十分な説明はできない。「一体分身」という神祇観が反映して「天神御哥」と記したのであるか。

天神の神詠や伝承歌が、神宮の連歌好士のうちで話題となったのはなぜか。三輪明神の神歌が、「天神御哥」として語られたことをどのように理解すればいいか。不明なことは多々あるが、『かさね草紙』や『二根集』が記録する話題は、伊勢の天神説話の究明のために、さまざまな課題を提供してくれる。ここではひとつだけ、道真の遺詠から「白太夫」説話について考えてみたい。

(一六) 道真の遺詠

『かさね草紙』の北野天神説話が、連歌の徳を称揚し、天神を讃歎する話題であったことはすでに述べた。神宮の連歌好士のあいだに伝えられた敬神の念は、あらたな天神説話を生みだしていく。三輪明神の歌が、天神の神詠に改められるのもそのひとつだろう。そのことは神宮連歌壇とどうかかわるか、『二根集』の天神伝承歌から道真の遺詠について取りあげてみよう。

天神、筑紫にての御詠

宵のまや都の空にすみねらん心づくしのあり明の月

前述した天神伝承歌であるが、前後の記事から推定すれば、おそらく細川藤孝(幽斎)からの聞書であろう。荒木田守平が有馬の湯に赴いたときのことである。『二根集』は文禄四年に編集されたのだが、

神宮連歌壇の北野天神説話

荒木田守平の記録したこの天神歌が、遙か時代を隔てて、江戸後期の書写になる『菅家瑞応録』（菅家文庫蔵）に、臨終を迎えた道真末期の歌として登場する。

夜已ニ更テ果、月輝キ、夜ハ明レトモ、尚月ハ天ニ掛リケルヲ眺メ玉フ、

宵ノ間ヤ都ノ空ニ住ヌラン心ツクシノ有明ノ月

ト詠シ玉フ、是菅公和哥ノ終ニシテ、菅公忠臣ノ道ヲ誦セラレケル、扱公ノ御不食次第ニ重ク成リマサラセ玉ヒテ、二月廿三日春彦示シテ曰、吾疾病ナリ、速ニ尊容ヲ迎ヘヨ、春彦即大悲合体ノ像ヲ机ノ上ニ安ス、公ノ曰、吾死シテ後、此尊容ヲ捧持シテ諸国ヲ遊行スヘシ、必一処ニ止ルコト無レ、

臨終の床を訪れた度会春彦に、道真は右の歌とともに、おのが姿を映した十一面観音像をわたして遺言とする。我死してのち、この尊像を携えて諸国を巡れというのである。ところが「宵のまや」の歌は、道真の真詠でもないし、臨終の歌でももちろんない。『二根集』も遺詠とは記していない。しかし『菅家瑞応録』はこれを遺詠として、死に臨んだ道真の望郷の想いが託される。室町末期に神宮神官によって記録された歌が、ここにあらたな形を与えられて蘇る。だれの手になる作爲なのか、今となつては明らかにしたいが、「此尊容ヲ捧持シテ諸国ヲ遊行スヘシ」と春彦に遺言して冥界へと旅立つ道真是、あたかも十一面観音の化身であるかのようにである。

春彦に託された形見の品、十一面観音は、北野天神の本地仏である。室町時代、応永期の連歌論書『連通抄』下には、つぎのように論説される。

今は天神の御代なり、其謂いかといへば、むかしは靈山会淨にして法を説、今は西方極樂世界の教主にて、極惡最下の罪人をも捨じとの方便也、濁世には観世音と顕て善惡人共に物給ふ願有、就中十一面観音と顕て下品の衆生をもらさで導引給ふ也、今の世

の北野天神にて御座、ありがたき御事をや、近比より連哥の道をたて、愚なるをも此道に入んとの方便也

北野の本地仏十一面観音は、下品下生の衆生、極惡最下の罪人をも救済する慈悲深重の仏である。北野天神が連歌の道をたてたのも、愚かな衆生を救うための方便であるという。この論説にしたがえば、道真是深重の罪人を救済する十一面観音の變化身といつてもいい。

北野天満宮蔵『神記』（応永十二年奥書）は、「本地十一面観音」について言及しながら、伊勢神宮も十一面観音の垂迹だとする。

十一面 当社ヲハ伊勢天照太神最後ノ化身ト習也、伊勢当社共ニ十一面ノ垂迹也

北野も伊勢もともに十一面観音の垂迹であることを強調して、北野の神は、天照大神の「最後ノ化身」とまでいう。これは北野側の主張であり、伊勢の神威をこのようにして利用する。現実的に考えれば、本地十一面観音は、北野にとってたいへんありがたくて便利な仏さまである。道真是観音の化身ともいえるし、観音は天照大神の化身とも宣伝できる。

これはあくまでも想像だが、伊勢もまた、こうして北野の信仰を利用したのであらう。「白太夫」度会春彦は、十一面観音を携えて諸国を遊行する（『菅家瑞応録』）。この春彦の姿からは、伊勢信仰を持つ檀那場を廻った御師の活動を連想させられる。事実、『菅家瑞応録』の白太夫伝説について、伊勢御師の関与が指摘されている。伊勢の御師は、「伊勢天照太神の化身、十一面観音」の尊像を携えて巡歴する「白太夫」に託して、伊勢の信仰を宣伝して歩いたのではないか。もちろん「白太夫」は実在の度会氏春彦とは、何の関係もない。あくまでも北野・伊勢両社の信仰が作りだした伝承上の人物といつていい。道真の遺詠「宵の間や」の歌は、神宮連歌壇で、北野天神の歌として伝承されていた。この天神伝承を巧みに利用したのは神宮神官たちである。詳しく述べる余裕はないが、外宮長官を務めた松木氏も、

「白太夫」度会春彦の末裔と称する伝を残している（『勢陽五鈴遺響』度会郡）。それは事実ではない訛伝であるにしても、彼らは巧みに信仰宣伝に利用したのである。「宵の間や」の歌が、道真の遺詠として『菅家瑞応録』に記録されたのも、和歌や連歌を信仰宣伝の方便とした神宮神官や御師の活動をぬきにしては、おそらく理解できないであろう。彼らにとって「北野天神説話」は、お伊勢さんのご利益をひろめる大切な財産であった。

（注）

（1）福田晃『京の伝承を歩く』（旧五条の道祖神）淡交社（一九九二年）

（2）岡見正雄「面白の花の都や」（『室町文学の世界』所収）岩波書店（一九九六年）

（3）（4）奥野純一『伊勢神宮連歌壇の研究』日本学術振興会（一九七五年）

（5）『幽斎君御事蹟並御和歌等拔書』（永青文庫蔵）。また『多門院日記』（永禄八年八月八日条）に癡をおとす歌として、「ツユ落テ松ノハカルクナリヌレハ雲ノヲコリヲハラフ秋風」（弘法大師作）がのせられている。

（6）注（3）前掲書

（7）『北野天満宮史料 古記録』北野天満宮史料刊行会（一九八〇年）

（8）松岡心平『中世芸能を読む』岩波書店（二〇〇二年）、岡見正雄「ものゝ出物・物着・花の本連歌」注（2）前掲書

（9）鈴木元「室町初期の北野信仰と伏見宮」森正人『伏見宮文化圏の研究―学芸の享受と創造の場として―』（平成十年～十一年度科学研究費補助金研究成果報告書・二〇〇〇年）

（10）奥野純一『二根集』古典文庫（一九七五年）

神宮連歌壇の北野天神説話

（11）伊藤正義『謡曲雑記』和泉書院（一九八九年）、同『謡曲集下』新潮社（一九八八年）、西村聡『三輪』考（『皇学館論叢』十二巻六号）一九七九年、小田幸子「作品研究 三輪」（『観世』）一九八一年

（12）この歌に「唐衣」が詠われていることから、いささか推定すれば、北野の渡唐天神説話が交響しているのではないか。無準禅師の夢の中に参禅した道真は、

唐衣織りて北野の神ぞとは袖に持ちたる梅にてぞ知れ

と答えて、無準から梅花紋の衣を授けられる。これもまた神詠にまつわる受衣説話である。渡唐天神説話が禅林はもろんのこと、連歌師のあいだにもよく知られていたことを思えば、三輪神の受衣説話を北野天神の歌としたのも、あるいは連歌師の関与があったのかも知れない。拙稿「渡唐天神の秀句―禅林の夢想天神説話―」（『咄・雑談の伝承世界―近世説話の成立―』三弥井書店（一九九六年）

（13）中村幸彦「白太夫考」（『中村幸彦著述集』第十巻）中央公論社（一九八五年）

（本学教授）